

?年と教育 : 論説

著者	巴城子
雑誌名	龍南會雜誌
巻	26
ページ	6-11
発行年	1894-05-07
その他の言語のタイトル	青年と教育 : 論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4384

杖が折らるゝなれば其一半は常も存すべし其一半を取りては之を折り又折りては之を幾千萬年に至るも竭きざるあり

又莊子の書に記す南方に崎人あり黃繚と曰ふ天地の墜ちず陥らざる所以と風雷雨霆の故とを問ふ惠施辭せずして應じ慮らずして對へ徧く萬物の説を爲し説きて休まず多くて曰むことよしと又惠子の書に載す客あり梁王に謂ひて曰はく惠子の事を言ふや善く譬をなす王譬ふることあからしめば言ふこと能はざるべしと是に於て王惠施に謂ひて曰はく願はくば先生事を言ふ直言して譬をなすこと勿れ惠子對へて曰はく今こゝに彈を知らざるの人あり我れに問ふて彈の狀何若と曰ふときは之に應じて彈の狀は彈の如しといふて了解せらるべきや王曰はく了解せず惠子曰はく然らば彈の狀は弓の如くにして竹を以て弦となすと云ふときは了解せらるべきや王曰はく了解すべし惠子曰はく夫れ説者は固よりその知る所を以てその知らざる所を論し而して人をして之を知らしむ今譬ふること勿れと言ふは則ち不可ありと以上の傳述に依りて之を觀るに惠子は甚だ辯説に巧にして萬事に通じ萬物を究め類を引き喩を設け縱横馳騁、循環窮りなく人をして端倪するを得ざらしめし者の如しその論中固より放誕無稽の言多かるべけれども凡庸の眼を醒まし偏狹の見を除くに於ては豈に小補あしとせんや而るに莊子は傲然とて曰はく天地の道より惠施の能を觀せば其れ猶は一蚊一虻の勞する者の如しその物に於ける何んぞ補はんと此れは則ち莊子の放誕なり放誕は放誕と對壘して相下らず眞に是れ戰國の一奇觀

(未完)

教育の目的は何くに在りや、教育の大本は果して如何とは、教育社會にある者の考察すべき所、而して教育事業の確立する所以の基礎なりとす。此の問題の解釋に於て分明精細ならざれば、教育家は終に其任務を完ふざる能はざるべく、又若し此の問題の解釋にして正當合理ならざれば、教育の事業は終に人を殺ふに至るべし。今日の教育家は固より學力經驗に富まざるにあらざるべく、又教授訓導の術に達せざるにあらざるべし。然れども彼等の事業往々形式は流れ、虚飾に陥りて、雄大活潑ある人物を養成する能はざるは何か故ぞや。是れ實に教育の本旨を解釋する十分ならざるに因らざるべからず。

世の教育家或は慷慨して曰く、『今日の教育界師道大に衰へたり、青年は放恣にして師長に從順ならず』と。斯く云ふは可也、吾人も亦た從順は青年の美德あることを知り、且つ今日の青年往々放恣に流るゝものあるを認む。然れども之を矯正せんが爲めに、從順を強ひて終に屈從の弊に陥り、或は譴責黜罰を厲行して放恣を拘束せんとし、或は又教育を政略的に施行せんとするが如きに至ては、抑も亦た本末を誤れるものにあらずや。嗚呼彼等は屈從を以て青年の美德ありと信じ、術數的方法を以て教育を行はんとせり、宜哉教育の方法規則的にして律法的あることや。果して是れ教育の本旨とする所あるか、吾人は大に疑なき能はず。

抑も人性は靈活なるものあり、人間の事業社會の發達歴史上の出來事等は、詮し來れば皆此靈活なる人性の作用發動せるものにして、或は單獨的に動き或は總合的に動きて、種々の現象となるものなり。蓋し人間は此靈活なる人性を有するが故に、各々自主を得獨立を得。此の如く人間をして自主を得獨立を得せしむる者を稱して『我』と云。我名汚され、我家衰へ、我産散り、我身苦み、我論棄らるゝ

も、『我』ある本牀にして滅せずんば、則ち未だ『我』ある者死せず、以て社會を潤歩し、流俗を教導するに足る。『試みにいざや呼ばらん山彦の、應たにせば聲は惜まじ』と云ふ、是れ象山の象山たる所以にほらずや。『已把死生附餘事、寧因榮辱負初心』と云ひ、『我今爲國死、死不背君親、悠悠天地事、感實在神明』と云ふ、是を松陰の松陰たる所以にあらずや。彼等は譏誣誤解の中に於て或は牢獄窓裡に於て『我』を信せり、故に従容として談笑するを得たり。『ヴィクトル、ユーゴーが『千人眞に立たば我彼等と與にせん、若し百人なるか是れ亦可あり、若し十人なるか我、我名を眞先に記さん、若し一人あるか、可也我、我墓を見るまで進まん』と云へるが如き、ルーサーが『怪魔屋上の瓦片より三倍多うらまむるも、我は之に入ることを辭せず、何となれば眞理を明示するは止む可らざる必要にして、我身命は必しも必要にほらざればあり』と云ひ、『假令我に五百の首ありて盡く之を失ふとも、我は我が信ずる所の一個條をも改むるを欲せず』と云へるが如き、亦以て其胸中『我』ある者獨立不羈ありしを推するに足る。知るべし『我』なる者確存して始めて勇氣生し剛毅生ずることを。個人の獨立は個人的我的確存によりて之を得、而て之に依りて自由を保ち、進歩發達を遂ぐるもれあるとを知らば、國家の獨立も亦た同じく國家的我的確存に基き、且つ之に依りて社會の活進進歩を得るもあること、推し得て餘ありと謂べし。蓋し國家の獨立は即ち國民の獨立あり、而て國民の獨立は個人の獨立に依りて之を得。亦た以て個人的我的國家の獨立に關係する甚だ大あるを知るべし。教育は個人に如何なる關係を有するか、即ち個人の獨立を完からしむるを目的とするや否や、言を換て之を云へば、教育は個人的我的我を如何にせんとする。吾人は信ず、教育は個人的我を完全に確存せしめ、充分に強健ならしむるを任務とするものあることを。教育の價值ある所以も亦此任務あるが故に

無ずや。果して然らば教育は決して屈従を教ふるものにあらず、何とあまれば屈従は奴隸の主人に對するが如く、自主なく獨立なき状態即ち個人的我的の存立せざる状態を云ふものなればなり。世の教育家にして教育を政略的に施し、壓制を以て屈従を強ゆる者は、之を小よしては個人の獨立を害し、之を大にしては國家の獨立を傷くるものと云はざる可らず。若し今日の青年に之を彼等の欲する所の屈従を具備する者たらざれば、如何にしてか社會の健全を望まん、將又如何にしてか國家の獨立を保たん。嗚呼豈に恐れて懼れざる可んや。

吾人は決して從順を以て青年の美德にほらすとせず、勿論人倫に於て服從恭順の缺く可らざるを信ず。然りと雖も吾人は屈従は飽くまで嘉納する能はざるなり。凡そ屈従あれば自由なし、自由なければ親和なし、親和なくんば如何にしてか人倫の成立を得ん。思ふに人倫の大道は人性の奥底より發し來るものあり、或は父子の親と云ひ、或は君臣の義と云ひ、或は長幼の序と云ひ、或は朋友の信と云ひ、或は夫婦の別と云ひ、其名各異ありと雖も、畢竟するに是れ個人と個人との關係に外ならず、言を換へて之を云へば『我』と『我』との關係あらざる可らず。然るに今若し一人ありて他の一人に屈従を要むとせば、是れ甲は獨り『我』を存して而して乙に『或』を滅せんことを要むるものあり。此の如きは之を高等動物と劣等動物との間に要むべしと雖も、決して人と人との間に要む可らず。茲に一例を擧げんか、一人ありて其君とし事ふる者に侃々諤々の議論を以て其事の改變すべきを諫むとせよ、而して此時君たる者其忠言を放棄せんことを強ゆるも、諫むる者は毫毛之を顧みず終に其信する所に殉せりとせよ。是れ君たる者は臣たる者よ屈従を要めて人倫を破り、臣たる者は『我』の確存を保ちて人倫を完ふせるものなり。知るべし屈従ある處に人倫の成立する能はざることを。

青年は飽まで靈活壯烈ならざる可らず、何處までも天真爛漫ならざる可らず。眞摯赤誠は彼等の特質あり、磊落なる公明ある大膽なる、百難を排して屈せざる、信する所を執りて移らざる、意氣鋭俊にして挫折せざる、挫折して失望せざる、是を皆青年が他の年輩の者よりも多く有する所の性質あり。古哲の稱して『青年を觀て其國家の將來を卜するを得』と云ふもの豈に理あざとせんや。而して此靈活にして公明ある行爲は即ち獨立の精神より湧出せ來るものにして、此精神こそ人間の價値の寓する所あり。

社會の進歩發達は多くは獨立の精神に充滿せる青年の手腕によりて成就せらる。彼の米國の獨立事業或は歐州宗教改革或は明治維新の事業に於ける青年の位地如何ありしかを知らば、則ち青年は社會の生命たり光明たる亦た知るに足る。果して然らば青年は何故に社會の生命たり光明たるを得るか、曰く元氣活動の源泉たる獨立の精神を有すればなり。吾人と固より從順は青年の美德あるを知る、然れども獨立の精神なき從順は是れ屈從なり奴隸の状態あり。此故に吾人は飽まで從順の美德を必要とすると共に、獨立の精神を養成せざる可らざることを主張す。夫れ然り教育家よして此二者を併行せしむるを得ば則ち其任務完しと云ふべし。

教育家の任務果して此の如しとせば、吾人は今日の教育家に大に嫌焉たるものなくんばならず、切言すれば彼等は教育の本旨を誤解曲論せり。其壓制によりて從順の徳を養はしめんとするが如き、或は其教育の方法を政略的に解釋するが如き、或は又詭譎譴責を嚴厲して得々たるが如き、是れ實に青年鋭俊の氣象を挫き、獨立の精神を害ふものにあらずや。吾人は此の如き教育家の下に眞摯にまて熱誠ある、公明にして正大なる人物出て來るべしとは、如何にまても之を信する能はず。

吾人は之を聞く、ピットの妹曾て英國の教育を痛撃して「余は教育を嫌ふ、何とあれば人をして器械の如く一樣をらしむ」と云へりとかや。此言矯激なりと雖も是れ亦た世の政略的教育家頭上の一針たらざるばあらず。

雜 錄

時 文 摘 話 (第三)

助教授 黒 本 植

○何々トイヘドモ、シカレドモ云といふ事

「イヘトモ」といふ詞は「イフ」といふ詞の第五階を用ひて、これに、「ドモ」の接續詞をつけたるあり、「シカレトモ」は「シカリ」といふ詞の第五階を用ひて、これに、「ドモ」の接續詞を加へたる者にして、何れも、轉接詞あり、されは、「イヘドモ」といへは、「シカレドモ」といふにや及ふ、「シカレドモ」を下にわかは、上の「イヘドモ」は、削りて可あらん、然るよ、今日の新聞などを見るに、この二語を並用するは、別に何といふ見解もなく、只漢文よみの重習、白首に至るまでうせざるあるへし、今一二例をわけんに、

雖_レ美而不_レ彰、雖_レ盛而不_レ傳、

善人雖_レ多而不_レ厭也、

更_ニ然の字を用ひたる例をあげば、

清濁雖_レ不_レ同、然不_レ以_ニ濁者不_レ爲_レ水也